

# 柏 和夫（かしわ・かずお）

## 1、プロフィール

浪岡町北中野西光院に生まれる。住職を務めながら演劇活動、詩作する。同人誌「実在」を編集する。地域の文芸活動にも努め、32歳の若さで惜しまれながらこの世を去る。

<生没>

1932(昭和7)年6月2日～1964(昭和39)年6月28日

<代表作>

詩集『心鎮まらず』

<青森との関わり>

法然の弟子金光上を開祖とする西光院の住職。津軽座で演劇活動、同人誌「実在」の編集。遺稿詩集1冊あり。

## 2、作家解説

32歳の若さで死去。遺稿が同人仲間安利麻慎等の手でまとめられ、詩集『心鎮まらず』が刊行される。和夫は西光院に6女1男の跡継ぎとして生まれる。10歳頃得度、竜導の僧名を持つ。しかし、成長してからは、美術学校へ進んで編の勉強をしたいと希望し、父の強い反対にあう。結局大正大学へ進学。この際の心労のためか和夫の下宿先を決めて帰宅した父が逝去。電報で死を知らされた和夫は、自分が父を殺したと泣き、悔いる。大学在学中、和夫の目は絵の世界から演劇へと向けられていく。19、20歳の頃から東京で演劇の世界に足を踏み入れる。三好十郎の戯曲座に入って演劇に打ち込む。

しかし、父の死に自責の念を持つ和夫は、浪岡に戻り西光院の住職となる。住職となっても、弘前の津軽座で演劇の活動を行い、また詩の同人誌「実在」(1960年9月創刊～1967年11月13号で終刊)の編集を、亡くなるまで務めている。地

域の若者を相手に演劇の稽古を行ない、町の公民館で発表し、好評であった。地元の人達の他にも友人知人が多く西光院に集まり、サロンの存在であった。

1人息子の1歳の誕生日を迎えたその同じ月に倒れて入院する。東京オリンピック開催の年 39 年6月に病死する。遺族が和夫の遺稿を安利麻慎(工藤富士雄)に託し、詩集として刊行されたのが『心鎮まらず』である。詩人というよりも演劇に力を注いだ人であったが、刊行された同詩集は、どこか清澄な鋭さを秘めた、誠実な心を感じられる作品で、和夫の感性に、若くして亡くなったことが惜しまれる。

なお旧弘前中学同級に清藤碌郎、平井信作がいる。

また西光院は、法然の弟子金光上人が、東奥最初の念仏道場として開いたもので、和夫は同院住職 76 世にあたる。

### 3、資料紹介

#### ○『心鎮まらず』

図書

1967(昭和 42)年8月 15 日

195 mm × 122 mm

詩集、遺稿から同人仲間の手で編集されて刊行。詩 20 編収められている。万里子夫人、一子和順を歌った詩も収められている。語句、行間から清光、清澄な雰囲気や詩性が感じられる。